

「核なき未来」への考察

現代の若者に求められること

川津せり

■はじめに

第二次世界大戦敗戦後、日本は原子爆弾を落とした張本人であるアメリカの政策のもと発展し、広島・長崎への原子爆弾投下は正当化されて歴史上のものとなった。現在での核の議論は高度の政治的判断と深く結びつき¹核兵器としてのものではなく、抑止力としての核や外交のカードとしての核。このような核の生み出した「概念」に囚われている。本稿では戦争・原爆を体験していない現代の若者たちがその歴史を継承し、核なき未来を考えるために何が求められているか。について「自分ごと化」をキーワードに考察していくものである。

■自分ごと化

私の通う麗澤大学では、現在起こっている戦争や過去に日本で起きた原爆について調査し、それぞれが核や戦争の問題に対して疑問を持って探求していくという趣旨のもと、生徒主体の自主企画ゼミナール「ナガサキで考える戦争と原子力」が立ち上げられた。実際に今年6月には長崎を訪れ、原爆資料館や平和公園を見学して原爆の事実と痛ましい被爆者の姿を目の当たりにした。さらに自身が被爆者である三瀬清一郎さんのお話を聴く機会もいただいた。彼によって語られるリアルな原爆体験からは核の起こした悲惨な状況を鮮明に思い描かせられた。

三瀬さんは私たちを通じて平和のありがたさを忘れずにいて欲しいという想いを話されていた。この被爆当事者の言葉がわたしたち非当事者である若い世代を「媒介する」という体験が「自分ごと化」であり、今回の問いを考える上で重要な役割だと考える。自分ごと化というのは場面によってそれぞれの解釈を持っている。そのため本稿で用いる自分ごと化という言葉の解釈として以下二つを挙げる。①当事者の出来事を自分の状況に置き換えて想像すること。②ある物事に対してその責任＝responsibilityが自分にもあるというつながり意識を持って考えること。

■対話的要素

現在、政治や安全保障といった観点から議論される核は抑止力という概念で正当化されるが、長崎でフィールドワークを行い三瀬さんの被爆体験講話を聴くと、核が正当化されることに対しての違和感を一層感じるようになった。これが置き換えによる自分ごと化である。ここでは対話的要素が関係していることも考えられる。当事者が実体験について語ることは受け止める意義のある人がいるからこそ成り立つものであり、それは対話的行為

¹ 土山秀夫（2020）『「核廃絶」をどう実現するか 被爆地長崎から日本と世界へ送るメッセージ』論創社, 6頁

であるといえる。また、受け手の中では外界からの刺激を受け、自分の中で内的対話が起こり、置き換えの自分ごと化を促している。

■責任意識

置き換えの自分ごと化には同情や共感をしているに過ぎないという問題が残る。思想家の佐伯啓思は、「東日本大震災における非被災者と被災者にはどうにもならない“ある断層”がある。」と示している。²非当事者である私たちは、その境遇や痛みから自分との比較を通して共感をすることはできても、当事者としての体験を理解することはできないのである。この表面的な共感で核なき未来を望むことができるだろうか。佐伯はこの問題について「非被災者もわずかな運命の匙加減によって被災していたかもしれない。とすれば論理的な想像力を働かせて、このような大震災は被災者も非被災者も包み込んだ共通の経験とみる。」というように考えている。³核を作り出した“人間”として、誰にでも起こり得たことであるという共通の責任意識を持つ。これが責任意識の自分ごと化をすることである。責任=responsibilityと上記したように、責任とは応答=responseすることだと捉えられる。今を生きている私たち若い世代が核の問題を前にした時、どのように応答するかが重要であり、主体的な平和学習もその一歩といえる。

■考え続けること

責任意識の自分ごと化の役割とは考え続けることである。事前学習で調査した現在進行形で起きているロシアウクライナ戦争をはじめ、核兵器保有の問題、そのほか戦争以外にも膨大な社会問題が残され続けている。だからこそ今、若い世代が自ら核や戦争の問題を知り自分ごと化という内的対話を起こす。そうしてあたりまえを疑い、共通の責任意識を持つことで過去に日常化させてしまった戦争と原爆の悲劇をくり返させない。さらに現在問題視されることについて自分の立場や視点から現状と未来を考え続けることができる。

■おわりに

資料館で核の事実を伝えることや、被爆者が被爆体験を語ることで過去の傷を拭うことはできない。しかし未来をつなぐ若者たちが原爆の実体から刺激を受け、自分ごと化の体験を通して考え続けることで新しい未来を形作っていくことができるということを知るべきである。これが私たち現代の若い世代に求められることであり、そこに核なき未来を考えることができるだろう。

² 佐伯啓思 (2012) 『反・幸福論』新潮社, 174-175 頁

³ 注3 前掲書, 175 頁

参考文献

- 土山秀夫（2020）『「核廃絶」をどう実現するか 被爆地長崎から日本と世界へ送るメッセージ』論創社
- 佐伯啓思（2012）『反・幸福論』新潮社